

〔論文〕

イエスの弟子，内村鑑三

葛 井 義 憲

名古屋学院大学法学部

要 旨

イエスの友の多くは世の片隅に置き去りにされ、闇路をヨロヨロと歩き、罵倒と嘲りの大地で息を凝らして過ごす者たちであった。心身のどこかにスティグマ（stigma）をつけたままで歩いていた。かかる存在に光をもたらすイエスもまた、スティグマをつけ、重荷を背負って歩む者であった。

その存在と内村は出会う。欧米に伍する近代化を目指すこの国から賞賛を得ることの出来る資質を備え、「高等教育」修得に激しく励んだ人物である。そうした人物の多くはイエスが癒しと慰め、救いを語りかける場所に冷ややかに佇み、機会あれば、イエスを非難、罵倒しようとする者たちの一人に数えられる存在たちであった。

そうした可能性を有す内村がイエスと出会った。そして彼は変えられていった。しかも、この十字架の上のイエスにすべてを託し、イエスの贖罪を求め、懸命にイエスの言葉を聴きつつ、それらを伝えて歩んだ。

それは通常、不可解と云う言葉をもって表される旅路であった。この不可解を凝視しつつ、考察、執筆した。

キーワード：平地の説教，内村嘉寿子，不敬事件，静かな細い声，知的障がい児

The disciple of Jesus, Kanzou Uchimura

Yoshinori FUJII

Faculty of Law
Nagoya Gakuin University

発行日 2018年1月31日

1. 悲哀のもとから

ナザレのイエスから発せられる神の愛の言葉を聴こうとして、多くの人たちがイエスを取り囲む。その人たちは、日々の生活の重荷を背負いつつ、一日、一日を精一杯生きている。その人たちに向かって、イエスは「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである。今飢えている人々は、幸いである。あなたがたは満たされている。今泣いている人々は、幸いである。あなたがたは笑うようになる（後略）」（ルカによる福音書6：20～21）。

彼のもとに集い、彼を取り巻く者たちは生活の貧しさを味わい、病や障がいなどに難渋し、「我が肉体」をもってしか生きられない悲しみをいただく者たちである。また、ローマ帝国の「手先」（徴税人）と唾棄される痛苦に耐えて歩む人たちでもある。かかる人たちがイエスを見つめ、耳傾ける人たちの中に混じっていた。そしてこれらの人々は、彼らの地で暮らす人たちの生き方、生活の在り方などを価値づけるユダヤ教から「罪びと」「悪人」「汚れた者」と見下され、排斥される者たちであった。つまり、彼らはユダ教に基づいて生きる「良民」にだけもたらされるはずの神の救い、神の恵みの外に追いやられた者たち、「恵みと救い」の事柄と「無縁な」者たちと見なされる存在であった。

この悲哀、痛苦を抱える人たちに迎えられ、神の福音を宣べるイエス自身も、彼らと同様に「痛み、悲しみ」をこの世で味わう一人であった。そのイエスが人々の苦悩を十分に知りつつ、ルカによる福音書6章に記載されている言葉を発した。さらに、つづけて、「社会的に無用」と見なされ、唾棄されるべき存在でしかないと考えられていた人々もまた、創造の神に赦され、祝され、この世で果たす役割も、生きる意味もあるのだと語った（B. P. Holt, *Thirsty for God* (Minneapolis: Fortress Press, 2005), pp. 40-1）。そしてかかる神の言葉に触れた人々の心に、「自分たちも生きる意義があるのだ」との喜び、「この世の現在・明日の建設に寄与できるなにかがあるのではないか」との希望があふれていった。大工の「子」イエスは、みずからのいのちをこの世にささげ、すべてのいのちの赦しと救いと希望を人々にもたらし、他者を自らのように愛することと、この世の平和へ向けて進むことを伝えた。

しかして、イエスのこの語りかけは内村鑑三の内にも染み渡っていった。内村もまた既成教会から「既成教会」外の人」と見なされ、排除されることがしばしばであった。そんな彼が1901（明治34年、内村41歳）年3月、「無教会」というタイトルの雑誌を発行している。その冒頭の社説「無教会論」で、彼は次のように述べる。

「無教会」と云へば無政府とか虚無党とか云ふやうで何やら破壊主義の冊子のやうに思はれますが、然し決して爾^そんなものではありません、「無教会」は教会の無い者の教会であります、即ち家の無い者の合宿所とも云ふべきものであります、即ち心霊上の養育院か孤児院のやうなものであります、「無教会」の無の字は「ナイ」と訓^よむべきものでありまして、「無にする」とか、「無視する」とか云ふ意味ではありません、金の無い者、親の無い者、家の無い者は皆な可憐な者ではありません乎、さうして世には教会の無い、無牧の羊が多いと思いますから茲に此小冊子を発刊するに至つたのであります（『無教会論』（『内村鑑三全集』9所収）岩波書店、1981年、71頁）。

イエスは神の救いの「外に置かれた」人々をも包含して、愛の福音を告げ、神の慰めと癒しの眼差しがすべての存在に注がれていることを明瞭に知らせ、表しつつけた。そしてこのイエスの言行は内村の日本でのあり方を点検させ、変えさせる力と導きを持つものであった。

内村が二つのJ (JesusとJapan) を掲げて、近代日本でささやかながらも活動しようと望み、米国より帰国したことはつとに有名なことである。しかし、その希望は順風満帆なものではなかった。彼のアメリカより帰国後の足跡を簡略に辿ると、1888 (明治21年、27歳) 年5月に帰国し、同年8月に北越学館仮教頭に就任するために新潟に赴き、12月、退職して、東京へ戻っている。そして翌年の1889年3月には、東洋英和学校及び水産伝習所の教師になり、1890 (明治23年、29歳) 年9月、第一高等中学校嘱託教員となっている。彼の歩みを見ると、帰国後の彼は学校教員を中心にしながら、二つのJの展開を試みようとしていることが分かる。これは彼が按手 (ordination) を受けておらず、牧師としての「資格」を有していなかったことにも原因があったことだろう。また、宣教師がもたらした多岐にわたる教派のキリスト教、「欧米の伝統・文化・生活のみ」を重視する「欧米キリスト教」でなく、そこから「解き放たれ」、日本の伝統・文化・生活などを排斥するのではなく、それを「土台」として尊重し、そこに「接木」する「日本キリスト教」の「形成、樹立」を図る上で、若き人々を育て、教える学校教員の有する意義をも理解していたためだろう。これまで、「無教会樹立とその福音宣教師」としての活動に注目されがちな内村であったが、彼20代後半の米国からの帰国後の足跡は学校教員を基盤にして活動していることを知らされる。そしてこの学校現場での出来事が彼を「無教会樹立とその福音宣教師」として立たせ、社会改良に大きな関心をもたせ、聖書研究へと邁進させていく原因となった。

1891年1月9日は、内村の以後の生き方に大きな影響を与える出来事が生じた。この日、第一高等中学校では、天皇親署の教育勅語（「教育ニ関スル勅語」、1890年10月30日発布）奉読式が挙行された。この式での内村の戸惑いを米国留学時代に世話になった友人ベル (David C. Bell) に宛てた書簡に素直に記している。

1月9日、私の教える高等中学校で教育勅語を受け取る儀式がありました。校長の講話とその勅語の奉読のあと、教授と生徒たちは、1人ずつ壇上にあがって、勅語に記された天皇の署名に頭を下げるように求められました。(中略) 私はこの奇妙な儀式をする心の準備が全然ありませんでした。それは校長が新しく工夫したものだったからです。私が壇上に上がって頭を下げる順番は3番目でしたので、そのことを考える暇はほとんどありませんでした。(1891年3月9日、東京小石川から米国ベルに宛てた手紙に記された内容。翻譯は鈴木範久のものを引用させてもらった (鈴木範久著『内村鑑三の人と思想』岩波書店、2012年、95-6頁)。

内村の英文も次に掲げておく。

On the 9th of Jan. there was in the High Middle School where I taught, a ceremony to acknowledge the Imperial Precept on Education. After the address of President and reading of

the said Precept the professors and students were asked to go up to the platform one by one, and bow to the Imperial signature affixed to the Precept...I was not at all prepared to meet such a strange ceremony, for the thing was the new invention of the president of the school. As I was the third in turn to go up and bow, I had scarcely time to think upon the matter. (『内村鑑三全集』36岩波書店, 1983年, 331頁)。

天皇を敬愛する愛国者内村にしても、神と同じく天皇を礼拝することができないとの躊躇がここに表されている。つまり、内村はたとえ、「教育勅語」に記述されている「日本臣民」として日本の発展に貢献したいと望んでも、この逡巡は「神と天皇」との「二神」に仕えることができない信仰者としての戸惑い、苦悩である。

この折の戸惑い、躊躇が当該校の教員・生徒、あるいは、新聞雑誌などから「国賊」「不敬漢」との言葉を浴びせられ、彼を糾弾する「不敬事件」へと発展させていった。内村はこの時、押し寄せる怒号の中で流感にかかり、床にふせていた。そしてその怒号や周りからの脅迫と向き合ったのは内村を看病する、結婚まもない妻、嘉寿子であった。

嘉寿子は同年4月14日、日本組合基督教会牧師横井時雄より洗礼を受けている。彼女もまた流感にかかり、心身の衰弱をきたしていた。そして同月19日、天へと召された。わずか1年9か月ほどの結婚生活であった。彼女の葬儀は寂しいものだった。葬列は明治女学校校長、巖本善治を先頭に、嘉寿子の棺の車の両側に、第一高等中学校の生徒が2人つき、その後、喪主内村、そして札幌農学校の内村の後輩、志賀重昂が従った。

「国賊」「不敬漢」と周囲から罵倒されても、内村を守り、そして終に召されてしまった妻嘉寿子は内村には憐れでならなかった。また、妻の死は自らの罪深さをも突きつけた。1892(明治25年, 32歳)年、翌年の1893年、「国賊」と糾弾される内村の各地を転々とする様子が、彼の年譜より明らかとなる。1892年9月、大阪の泰西学館の教師として赴任し、翌年4月、泰西学館を辞して、熊本の熊本英学校に教員として赴任し、そして同年8月には、京都に移り住んでいる。彼はここで、執筆などをもって糊口を凌ごうとしている。この折、内村は結婚していた。1892年12月、京都の判事、岡田透の娘しづが内村の妻となり、1894年3月、二人の間に長女ルツが誕生している。赤貧のもとでの、内村、しづたちの生活である。

しかし、このような難渋の時である1893年、彼の代表作が2冊、発行された。1冊は亡き嘉寿子に手向けの『基督信徒の慰』が警醒社書店から2月に出された。さらに、8月には『求安録』が同書店から発行されている。そしてこの一冊目の『基督信徒の慰』第1章は「愛するものゝ失せし時」との見出しがついている。その中に、嘉寿子の墓参りの折の出来事が綴られている。

一日余は彼の墓に至り、塵を払ひ花を手向け、最高きものに祈らんとするや、細き声あり一天よりの声か彼の声か余は知らず一余に語て曰く「汝何故に、汝の愛するものゝ為めに泣くや、汝尚ほ彼に報ゆるの時をも機おりをも有せり、彼の汝に尽くせしは汝より報を得んが為にあらず、汝をして内に顧みざらしめ汝の全心全力を以て汝の神と国とに尽さしめんが為めなり、汝若し

我に報ひんとならば此国此民に事^{つか}へよ、渠^かの家なく路頭に迷ふ老婦は我なり、我に尽さんと欲せば、彼女に尽せ、渠の貧に迫められて身を恥辱の中に沈むる可憐の少女は我なり、我に報ひんとならば彼女を救へ、渠の我の如く早く父母に別れ憂苦頼るべきなき児女は我なり、汝彼女を慰むるは我を慰むるなり、汝の悲嘆後悔は無益なり、早く汝の家に皈り、心思を磨き信仰に進み、愛と善との業を為し、霊の王国に来る時は夥多の勝利の分捕物を以て我主と我とを悦ばせよ（『内村鑑三全集』2岩波書店、1980年、14頁）。

彼は嘉寿子の墓で、預言者エリヤにささやかれた、同様の「静かな、細き声」（列王記上19：12）を聴いた。嘉寿子の墓参りは「現世」と「後生」との交わりの意義と、さらに、「現世」でのキリストにある働きの具体性を告げている。

この墓の前で聞こえた「静かな、細き声」は同年8月発行の『求安録』の中では、次のような表現となっている。

余は平安を得る途^{みち}を知れり、（中略）余は信じて救はるゝのみならず亦信ぜしめられて救はるゝもの也、此に於てか余は全く余を救ふの力なきものなるを悟れり、然れば余は何をなさんか、余は余の信仰をも神より求むるのみ、基督信徒は絶間なく祈るべきなり、然り彼の生命は祈祷なり、彼は尚ほ不完全なれば祈るべきなり（中略）力なき我、わが能ふことは祈ることのみ（同書、249頁）。

神に捕えられて生きるしかない内村の覚醒・決断が綴られている。「聖霊よ来たれ、我を神の虜にしてみらいたい」との必至な祈りがここにある。彼は自らを凝視するとき、自らの努力では拭い、消しきれない「薄情、汚穢、エゴイズム、悪」などが心身に付着していることに気づかされる（同書、232頁）。その「罪」の解消を、贖罪のイエスに求めるしかない。内村は綴る。「我は贖罪の必要を感じるなり」（同頁）と述べ、真剣に祈りつつ、救いを願い、この世での働きに勤しむだけだ、と。

2. 十字架のイエスを仰ぎ見て

「愛の静かなる、細き声」（Henri J. M. Nouwen, *Home Tonight* (New York: Doubleday, 2009), p. 10) を、内村は聴いた。これはイエスの初期の弟子、ペトロたちも体験したことだろう。さらに、内村はイエスの初期の弟子が漁師であったことに親近感と不思議さも覚えたことだろう。

ガリラヤ湖の漁師であったペトロたちのイエスとの旅路は北海道の「漁師」、北海道の漁業振興を期する札幌農学校卒業生（1881（明治14年、21歳）年7月）で開拓使御用係のエリート、内村鑑三の眼差しを十字架上のイエスへとさらに注がせ、イエスの真意を激しく探求させることになったことだろう。内村は1914（大正3年、54歳）年に『聖書之研究』第166号に載せた「真のイエス」のなかで自らの「イエス観」を語っている。

イエスは今猶依然として人に知られないのである、世が称揚するイエスはイエスではないのである、是れ世の想像にイエスの名を附けた者であつてイエス御自身とは全く違つた者である、世に轟くイエスは所謂「教会の首長」である、大いなる宗教家である、信徒の大軍を率ひて世界征服の途上に在る者である、所謂「偉大なる人物」、神がカイゼルとして顕はれし者、貴顕紳士までが敬仰する者である。

然し乍らイエスは如斯くにして世に顕はれ給ふ者ではない、在まさる所なき彼は極めて少数の人にのみ自己を顕はし給ふのである、世に実はイエス程人に知られない者はないのである（中略）余は人に知られないイエスの弟子たらんと欲する者である（中略）余は此小なるが故に大いなる、現はれたるが如くに見えて実は隠れたる此イエスの弟子の一人たらんことを欲する者である（『聖書之研究』第166号聖書之研究社、1914年、47-8頁）。

ガリラヤで「捨てられた人々」に愛の福音を語り、「神の国の到来」を告げるイエスのそば近くに内村も存在するかにように、イエスを仰ぎみている。そして彼は「人に知られないイエス」、「世の片隅に救いの光を灯すイエス」の弟子になりたいと綴る。

「高名富貴とは縁遠い」ガリラヤの漁師たちがイエスに魅了されて弟子になったと同じものがそこにある。しかし、ペトロたちは聖書が告げるように、十字架につけられた師を見捨て、逃げ去った。そしてその逃げ去ったという悔いの過去を有す彼らが、イエスの死と復活のなかで大きく変わっていった。この世で蔑まれるイエスを、神の子、救い主として明瞭に他者に表していった。

この漁師であったペトロたちの変容を聖書は告げる。変容を示す場所はエルサレム神殿である。そして「イエスは救い主だ」と告げる相手は「足の不自由な男」であった。彼はペトロたちにそこで「施し」を請うた。それに対し、ペトロはその人物に次のように告げた。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」（使徒言行録3:6）。

パレスチナの寒村ナザレで育ち、宣教活動をしたイエスを「救い主」だと明確に告げ、復活のイエスの救いによって活かせ、これからの日々を歩むことを一人の障がい者に告げる。この復活のイエスによる「神の国到来」の実現を語るペトロたちの営為はエリート内村にイエスにあって生きる意味を問わせ、復活のイエスとともに日々を歩むことを願わせたのだろう。

イエスもまた周囲から捨てられた悲哀の人であった。その悲哀と苦難を十分に味わった十字架上のイエスを、内村は仰ぎ、彼に身を寄せようとする。このとき、内村の中で回心（conversion）が起こったのだろう。

内村鑑三研究推進に貢献した鈴木範久は内村鑑三の回心の端緒をペンシルベニア州エルウィンにある「知的障がい児養護院（The Pennsylvania Training School for Feeble Minded Children）」での看護人体験にあったと考えている。彼は「[1885年1月から6か月ほど働いた] エルウィン体験は、実は内村の思想にとり、大きな変換を与えたものと考えてよい」ものだろうと記す（鈴木範久著『内村鑑三の人と思想』、63頁）。

内村は最初、知的障がい児養護院（院長、カーリン（Isaac Newton Kerlin））での看護人としての

勤務から学びの意義を見出せなかった。この折の仕事の内容を記した「流竄録」(『国民之友』233号所収、1894年8月よりこの冊子に掲載)は「読者よ、一個の大和男子、殊に生来余り外国人と快からざる日本青年が直に化して米国白痴院看護人と成りしを想像せよ、彼は朝夕是等下劣の米国人の糞尿の世話迄命ぜられたりと察せよ」(『内村鑑三全集』3岩波書店、1982年、63頁)と、札幌農学校出身の、優秀な人物だと見なされつづけてきた25歳の内村がエルインの知的障がい児養護院で味わった体験を赤裸々に綴っている。明日の近代日本の発展に寄与し得るだけの「力」を有す内村には、この養護院での仕事は当初、受け入れがたいものであったことを知らせる。彼は内村家の期待の星である。そして東京まで遊学をし、北海道に開設された官立の札幌農学校の2期生となり、そこを首席で卒業する。内村家の人々は彼のこの先に、「立身出世」が待ち、「高名富貴」となって、日本を指導する存在となるだろうと描いていたはずだ。しかし、鈴木が述べたように、このエリート内村の生き方に大きな転換を迫るものが、この養護院体験にあったのだろう。

内村の心も捕えつづける「平地の説教」(ルカによる福音書6章17節以降)の場に障がい者・児も加わり、イエスの愛の言葉に強く打たれていたはずだ。内村は『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』(1895年11月、英文のこの書、How I Became a Christianがシカゴで発行)で、養護院での体験を振り返りつつ、次のように述べている。翻訳者は鈴木範久である。

「人を愛する (love—man)」仕事である慈善事業 (Philanthropy) は、私の「自己を愛する (love—self)」傾向が、完全に心のなかより根絶されるまでは、私のものにはならないことがわかりました (『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』(岩波書店、2017年、203頁))。

内村の「生きる基軸」の変更が記されている。「自己中心」から、三位一体の神(父なる神の救いと愛、子なるイエスの赦しの贖罪と癒し、聖霊の日々の導きと助け)への転換があったことを表している。彼は、聴衆に語るイエスのそばで、ファリサイ派や律法学者たちのように、イエスの非をなじり、批判する側から、イエスの言葉に耳を傾け、学ぼうとする人々と同じ所に座って聞き入る人へと変えられていった。エリート内村が障がい児との毎日の生活の下で、院長カーリンの言葉、「神は一人も無益なる人間を造り賜はざるなり」(『内村鑑三全集』3、69頁)に納得させられたのだろう。知的障がい者・児施設(桃花塾)で「生活支援員」として働いた体験をもつ葛井義顕は「知的障害教育の父、石井亮一研究」のなかで、「この世に生を受けた全ての人間は神から愛される存在であり、全ての存在に生きる意味があり、尊い存在である」と、施設での働きを通して掴んだ人間観を記している(『金城学院大学論集〈人文科学編〉6-1』、2009年、41頁)。

内村は大きく変わる機会を用意された。イエスの言葉に真剣に耳を傾け、自らの罪を自覚し、イエスを見上げて罪の赦しと導きをひたすら祈った。それまで、「完全無欠でありたい、人々から賞賛され、注目される働きをし続けたい」との彼のひそかな「望み」は知的障がい児養護院での看護人としての働き、また、帰国後の過酷な日々と聖書の学びの中で消えていった。その思いの一端が1900(明治33年、40歳)年4月に東京独立雑誌社より出された『宗教座談』のなか書かれている。彼は神の摂理の下で、難渋の多い、未開の道を歩いてきた。しかし、それら一つひとつが、彼を育て、彼を

前へ向かって歩ませる上で無駄ではなかった。彼は言う。「宗教は事実であります。議論ではありません。信仰の事実なくして宗教は議論することの出来るものではありません」（『宗教座談』岩波書店、2014年、7頁）。堂々と明瞭に、自らの人生体験に基づいて生きるキリスト者、また、宗教者の日々を語る。「[これらの人々の要件は]働きに依るに非ず（中略）その行状の完全無欠なるに依るに非ず、すべて神を信じ、キリストにおいて現われたる神の救済を信じ、その罪を悔い神に依り頼む生活に勤しむことだ（同書、145-6頁）、と。

ここには、「苦難と薄幸の日々」に生き、この世から捨てられた十字架のキリストをひたすら仰ぎ、贖罪と救いと導きを求めて生きる彼の素直な回想（＝事実、*creed*でなく、*fact*）が綴られている。とりわけ、1891年の「不敬事件」、嘉寿子の死、そして彼に向けられた国中からの非難と怒号、学校、教会などからの「排斥」はいかにキリストにあって生きる上での信仰を深化、強靱にする「力」となりえても、しかし、彼もまた限りある、小さな、弱い存在であることは間違いない。それ故、切に、神の赦しと愛と導きを求めて歩まねばならない。内村42歳の1902（明治35）年、彼は「社会改良」を具体的に進める足尾銅山鉍毒問題解決¹⁾に尽瘁している。そして一方、同じ年に、「聖霊の導き」を中心とした「聖霊の要求」という一文をも書いている。彼はその中で自らの弱さとそれを越えさせてほしいとの祈りを記している。

或る時は神が見えなくなる、或る時はキリストが貴くなくなる、或る時は歓喜も希望も我が心より失せて我は普通の肉の人となる、其時には我は我が心に卑しく想はれて、何のために此世に生存して居るか解らなくなる（『聖書之研究』第17号聖書研究社、1902年、5頁）。

彼に迷いと苦悩が押し寄せる。そして試練と誘惑におののいて生きなければならないキリスト者内村の心の内を覆い隠すことなく赤裸々に記している。しかしてこの赤裸々の後ろには、キリストの十字架にすが²⁾しかない内村の信仰者としての真実の姿が厳然とある。

彼は嘉寿子を失った後に表した『求安録』（1893年）に次の詩を掲載している。

“But what am I? An infant crying in the night: An infant crying for the light: And no language but a cry.”（然らば我は何なるか、夜暗くして泣く赤児、光ほしさに泣く赤児、泣くよりほかに言葉なし。）（『内村鑑三全集』2、249頁）。

自らを「赤児」と認識し、十字架のキリストに赦され、おぶさり、しがみついて、この「荒れ野」の世で、神から与えられた使命（*mission*）に生きつづけるのだとの決意のほどを記述している。

3. おわりに

文明開化を求め、近代化を強力に推し進めようとする明治の日本にあって、そのスローガンの一翼を担いうる資質をもつ内村鑑三はこのスローガンから現れ出にくい、それよりも逸脱したかのような

生き方をあえて「選り」としていった。それは「立身出世」、「富国強兵」、「殖産興業」などの膨張と強化とギラギラした野望達成を奨励する近代日本の路線とは「逆の生き方」、「苦難が襲いくる方向」へと向かう「生き方」であった。内村はこの苦難が押し寄せる歩みの中であえぎ、悩み続けたことも事実である。それは1891年の「不敬事件」に起因して起こった「出来事」への対処の中にも表されている。

彼はこれらの苦難、「絶望」から逃げられなかった。そしてかかる難洪は彼を一層「苦難の僕」であるイエスの十字架へと向けさせていった。内村はこの難洪を凌ぐのは、十字架のイエスに自らの全存在を預け、いのちのみなもと（三位一体の神）なる神が表す赦しと憐れみと導きのもとで生きることであった。そして贖罪と愛につつまれ、イエスが指し示す平和と正義を求めて「未開の道」を歩みゆくだけであった。しかしこの難洪の歩みから、「すべてのいのちの尊さ」「生きる意義とこの世での使命」「神の愛と摂理」などがこの国で展開されていった。

この事実の一端が彼が日本中から「叩きのめされた不敬事件」の後に出版された『後世への最大遺物』（1897（明治30）年、便利堂書店より出版）の中に記されている。この書物は1894年7月、箱根で開催された基督教青年会第六回夏期学校で行われた講演記録である。この夏期学校開催の前年には、本稿でも取り上げた『基督信徒の慰』『求安録』が出されている。内村はいかにこの苦難のなかで、日々を過ごしているかを全国に知らせた一年後の講演である。彼は夏期学校に出ている若者に向かって次のように語りかけた。

私の心に清い欲が一つ起こってくる。すなわち私に五十年の命をくれたこの美しい地球、この美しい国、この楽しい社会、このわれわれを育ててくれた山、河、これらに私が何も遺さずに死んでしまいたくない、との希望が起こってくる。ドウゾ私は死んでからただに天国に往くばかりでなく、私はここに一つの何かを遺して往きたい、それで何もかならずしも後世の人が私を褒めたってくれいというのではない、私の名誉を遺したいというのではない、ただ私がどれほどこの地球を愛し、どれだけこの世界を愛し、どれだけ私の同胞を思ったかという記念物をこの世に置いて往きたいのである。すなわち英語でいうMementoを残したいのである（『後世への最大遺物他』岩波書店、2011年改版、17頁）。

罵詈雑言をあびつつ日々を生きる彼から、「同胞のこと」「日本とその社会のこと」、さらに、地球や世界や宇宙にまで視野を広げて「愛と希望と平和を求める働き」をしたいと語りかける。「優勝劣敗」を当然とする「膨張、巨大化」の気運のもと、「自由と平等と民主」を「嫌う」趨勢の中で、あえて、彼は「貧しい者、飢える者、泣く者」の側に立とうとする。イエスの愛の福音が日本中に漲り、そこから世界へ、宇宙へと広がり行くことを「夢見て」いた。こうした彼の生き方に、矢内原忠雄（経済学者）、井口喜源治（研成義塾校長）、南原繁（政治学者）、三谷隆正（第六及び第一高等学校教授）、斎藤宗次郎（宮沢賢治の友人、詩「雨ニモマケズ」のモデル）、藤井武・黒崎幸吉・金沢常雄・塚本虎二（四人は伝道者）たち、良心的で、誠実で、一途に愛の実践に生き、不屈で、義を求めて生きる人物たちは「師、内村」と同様にキリストの福音を具体的にこの世に表しつづけていった。

これら内村の「弟子」たちである彼らの生き方と実践はこの国と世界にイエスの赦しと愛の広大さ、一つひとつのいのちの尊さ、正義と平和の重要性を現在も伝えつづけている。「平地の説教」の席に連なり、イエスの言葉と活動に近くで触れるかのように近代日本で働いた内村はこの国と地球と、そしてすべての人々と社会に神にあって生きることの素晴らしさを知らせてくれる。

注

- 1) 足尾銅山の鉱毒で、渡良瀬川沿岸の大地とそこに生きる人々の惨状、荒廃は甚大であった。キリスト教会の側からも、この鉱毒地とそこに生きる人々の救済は「神の道」だとの理解・活動が高まっていった。その中に、内村鑑三もいた。1901（明治34）年5月、東京の神田青年会館で行われた「鉱毒調査有志会」委員選挙で、内村も委員の一人に選ばれた。彼はこの年、何度も、渡良瀬川沿岸に赴いている。（拙稿「足尾鉱毒事件と一群れのキリスト者」（『名古屋学院大学論集（人文・自然科学篇）23-2』所収、1987年、164-9頁）。
 - 2) 矢内原忠雄が友人藤井武からの内村伝聞を「内村鑑三」に記している。「藤井武が私に話したことであり『預言者のおもかげ』と題する彼の講演にも出ている話ですが、数寄屋橋教会の創立40年の祝賀会に内村が招かれて行きました。さきに講壇に立ったある有名な牧師が、内村を前にして無教会主義の攻撃をした。藤井ははらはらしてそれを聞き、内村が壇に登れば、どの様に痛烈な反撃を食わずであろうかと、固唾をのんで待っていたところが、順番が来て先生が登壇し、静かに「池で子供らが遊んでいた。たまたま水中に蛙を見つけ、石を拾って投げつける。憐むべき蛙は打たれる度毎に深く水の中にもぐって、在るひとりの者にすがりつく。そうしてその者に慰められて、傷はことごとくいやされる。」という話をされた。暴に報いるに暴をもってせず、暴言に報いるに暴言をもってせず、暴言に報いるに無抵抗をもってされた。藤井が非常に感心して、私に話してくれたことがある。」（『矢内原忠雄全集』第24巻岩波書店、1965年、586頁）。
- 矢内原は十字架を仰ぎ、贖罪と救いのキリストに「すがりついて、日々を歩む」内村の信仰姿勢を綴っている。